



芦安中学校だより

第 9 号

校長 石原敬彦
2019. 1. 21

2019年スタート!夢と目標を持ち一日一日を大切にしていきましょう。

1月8日の始業式では、生徒のみなさんに私の友人の話をさせていただきました。彼は東京大学の法学部に現役で合格、卒業後、弁護士となり、海外で弁護士として働く傍ら、さらに学び続けてキャリアアップ、現在では、一流企業の執行役員として世界を飛び回っています。

私が伝えたかったのは、東京大学とか華々しい職歴自体についてではなく、友人である彼が「世界を舞台に弁護士として働く」という自分の大きな夢の実現に向けて一日一日を大切に過ごしてきたということでした。そして、夢の実現のために、彼が常に具体的な目標と手段を考え、綿密な計画を立て、強い意志でその計画を一つひとつ実行してきたことです。彼と私は高校3年生の時同じクラスになり、それ以来私は、彼から大きな影響を受け、元気をもらってきました。高校時代の彼は、3年生の7月までバスケット部のレギュラーとして活躍、その後本格的な受験勉強に入りました。今でも私の記憶に鮮烈に残っているのは、300ページの超難解な問題集を「はじめから終わりまで最低でも3回やる」と公言して、達成するための計画を立案、入試の日から逆算して「一日何ページやればそれが実現するか」計算し、「そのページ数を終えるまで寝ない」という強い意志で本当に実現してしまったことです。彼は、学校が終わると県立図書館に行って8時まで勉強、家に帰って夕飯を食べて入浴、その後毎朝4時まで勉強することを日課にしていました。自分が決めたページまで終わらせることが出来ない時には徹夜することもありました。つまり、「目標を実現するために、一日一日、その日のうちに何をすべきか」明確にして、それを毎日果たしたのです。新しい年、芦安中の生徒のみなさんには、また新たな気持ちで夢と具体的な目標を持ってほしい、そして、実現に向けて一日一日を大切にしていってほしいと思っています。



1月1日の早朝6時、新聞配達出発式を終えて、芦安から昭和三町の自宅に戻る途中で、素晴らしい一年を予感する美しい元旦の朝の景色でした。

匿名の方から芦安中学校に心温まる贈り物をお送りいただきました。

1月15日のことでした。差出人の名前のない段ボール箱が学校に届けられたのです。開けてみると、毛糸の手袋がぎっしりと詰められていました。お手紙が同封されていました。読ませていただいて、ご厚意に対する感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。ありがとうございます。

「こんにちは。以前こちらの学校で新聞配達をされている所をテレビで見ました。

私は80歳です。長い間編み物をして来て 残り毛糸で手袋を沢山編みました。

色はあまり良くないのですがとても暖かいです。使って頂けたら嬉しいです。」

全校生徒全員に配らせていただける数をいただきましたので、全校生徒一人一人にお配りいたします。本来ならば、校長がお伺いしてお礼を申し上げるべきところですが、匿名でお送りいただいたことを尊重させていただき、学校便りで紹介させていただくことにいたしました。芦安中学校の生徒を応援して下さるそのお気持ちにお応えできるよう、生徒、職員ともに今後も充実した学校生活を送っていきたいと思います。



女性用と男性用をそれぞれ編んでくださいました。



暖かいメッセージもいただきました。

1月11日、有志の皆様のご支援で、「アマゴ」の放流を体験いたしました。

11月の終わりに、地域の有志の皆様から「中学校でアマゴを卵から孵化させて育て、稚魚を放流させてみませんか」というお話をいただき、生徒にとっては環境教育の面からも貴重な体験になると確信し、ご支援をお願いいたしました。校庭の池の沢の水を取り込む所に木の箱を設置、その中にアマゴの卵を入れて孵化させ、稚魚に成長したところで御栗使川に放流しました。アマゴはサケ科の魚ピマスの幼魚であり陸封魚とのことです。12月17日には、芦安支所のセンター長様にお越しいただいて、アマゴに関するお話もしていただきました。放流を行った1月11日には、地域より4方にお越しいただき、ご支援をいただきました。改めて感謝申し上げます。



アマゴの卵 11月28日。



校庭の池に孵化するための木箱を設置。



稚魚に成長 1月11日。



ご支援をいただいた4方と手順の確認。



紙コップに入れていただいた稚魚を全員が放流。



本校生徒の優しさを感じました。

「自分の考えをもつ」ということ

1992年の夏、私はプリティッシュカウンスルから奨学金をいただいて、イギリス、イングランドの中部にあるチェスター大学で2ヵ月間の「英語教員のための集中研修」を受講していました。海外の大学で学ぶのは初めてではありませんでしたが、参加者はみなさまざまな国からの英語教員のみでしたので、専門性の非常に高い研修内容となり、結果的に私は毎日をかなり緊張して過ごすことになりました。そして、1か月が過ぎた頃、私は研修についていくのに大きな困難を感じるようになっていました。その原因は自分でもよくわかっていました。「自分の考えをもつ」ということが思うようにならなかったのです。その研修にも当然、教科書や資料は与えられていました。授業の中で教授が質問します。「あなたならどうしますか。」「あなたはこれについてどう考えますか。」そんな時、私はいつも教科書の中に答えを見つけようとしていました。……

……どこかに正解が書いてあるはずだ……しかし、それらしい答えを教科書の中に見つけて答えても、教授からは「それはテキストの〇ページの〇行目に書いてあることです。私はあなたの考えを聞いているのですよ。」と言われてしまうのです。一方、そんな私とは違って、他の国から来ている多くの英語教師は、教科書や資料に書かれている内容に触れながらも、最終的にはそれらを使って自分の考えを作り上げ、自分の言葉で堂々と発表していました。彼らの話す英語は出身地によって独特のアクセントがあり、英語自体は洗練されていないのですが、彼らはそんなことは全く気にもとめない様子で、とにかく自分の考えをきちんと相手に伝えようと堂々と、熱心に語っていました。教授が発する問いも、「正解が一つとは限らない問い」でした。授業では、さまざまな考えが交流され、質問が出され、意見が続ぎ、しかし、教授は授業の最後にコメントはしますが、「こうでなければいけない」という答えを提示することはありませんでした。それぞれの考えが尊重され、交流によってさらに深められることが大切にされていたのです。そして私は、「正解は一つであり、その正解を誰よりも早く答えることが自分を高く評価してもらうこと」という前提が自分の中に無意識のうちに作られていたことに気づきました。言い換えると、「大切なことは正解することであって、正解を言えたら、それで終了。」という考え方をしていたのです。日本にはかつて「西欧に追いつき追い越せ」をスローガンにしていた時代があります。その時、最も効率が良かったのが、「正しいとされている事柄をそのままおぼえる」というやりかたでした。それは確かに大切ですが、そのやり方を続けているだけでは「自分で考える」という側面は欠落してしまいます。私が挫折したあの時からすでに30年近くが過ぎ、世界は変化のスピードをさらに加速しています。「自分で考え、自分なりの考えを確立する」ことの重要性はますます高まっています。考えの根拠を問われて、「教科書にこう書いてあったからです」「〇〇さんがそう言っていたからです」の一点張りでは、他者と協同することはもちろん、対話をとおして新しい価値を創造することもできません。自分で考え、判断し、それをきちんと表現できるようになること。日々の授業を中核にしてみんなで取り組んでいくべき最優先課題と考えています。

～私のささやかな海外での経験から～



1992年の夏、イギリス・チェスター大学で、私が一緒に学ばせていただいた人々たちです。さまざまな国の人がいました。32歳だった私がどこにいるかわかりますか。